

色 (rūpa) は物質ではない ——仏典における原意と訳語の考察——

村 上 真 完

「色」という漢字は、2 世紀中葉に中華に到って仏教経典を初めて訳した安世高に始まり、わが国でも今日まで用いられてきた。色 (rūpa) は漢字の「色」、日本語の「いろ、シキ、ショク」の意味と多く重なる。しかし近年、これを「物質」、「物質的現象」、「物質的なもの」、「物質的要素」などと訳す傾向が著しい。しかしこれは憂慮すべき傾向ではないか。なぜなら、無常という仏教の根本的な立場とも矛盾し、日本語にも混乱を来たすからである。ここに重大な問題がある。

1. 色の一般的な用例

色 (rūpa, いろ, かたち, 感じられるもの) の意味は、原典の文脈によって種々である。色は、まず人 (男女) の容姿や容貌や色艶である。

色 (色形 rūpa) と音と味と香りと触感と凡そ衆生を陶醉させるもの (Sn.387a) とある。この五は五欲楽 (五妙欲 kāma-guṇa, 欲望の属性) と呼ばれ、五感 (欲) の対象である。色は眼 (視覚) の対象で見えるものに限られる。これは狭義の色であって、認識の領域 (十二処, 六外処) に含まれる色である。そして『眼で色を見ても決して心楽しむこともなく心憂えることもない』(A.II.198²⁵, Pj.II.425²³) というように、視覚の対象である色に対して人は心楽しみ、または心憂えるのである。

「女の色 (itthi-rūpa) は男の心を捕らえている」(A.I.p.1¹⁵) / 「男の色 (pruisa-rūpa) は女の心を」(A.I.p.2¹³; ♪は前と同じ) ともいう。色は美男・美女の容姿、女性の美貌・魅力を意味し、「色を備えた」(rūpavati, Pj.II.243¹²) とは美人の形容である。色は恐ろしい夜叉等の姿でもある (Pj.I.233²⁷)。このような rūpa (色) は邦語の色 (いろ, ショク, シキ, 例えば「色を好む」とか, 女色, 色欲などの「色」) にも近く、色彩よりも肉体の容姿, 容貌, 容色, 顔色, 色艶を指している。

その色が無常であるという。そういう色は、絵の具や塗料, 顔料としての色ではない。塗料や顔料等の物質でもない。物質 (例: H₂O) は、形体が気体, 液体, 固体と変化しても永遠に存在する。無常な色とは、一瞬一瞬に眼に映る色であり、

(218) 色 (rūpa) は物質ではない (村 上)

実感される色である。そういう色は、二度と同じには見えない・感じられない。

これが色 (色形 rūpa) の本来的な意味 (原意) であるはず。これが狭義の色であり、認識領域 (十二処) の体系の色処 (色の領域) に含まれる。この狭義の色が直ちに広義の色 (色類) でもある。Sn 第5章末には老学生ピングヤ (Piṅgiya) が

私は老いて力なく色艶も失せました (vīta-vanna). (Sn.1120a)

云々と、釈尊に教えを請う。世尊は

諸々の色のために (rūpesu) 人々は放逸になって悩まされる (ruppanti). それ故にピングヤよ、あなたは不放逸にして再生がないように色を捨てよ (Sn.1121)

と答える。vanna (色艶) は、rūpa (色) の複数に置き換えられたが、諸々の色とはいわば肉体的な諸要素であろうし、感じられ意識されるものである。註釈は

諸々の色のために悩まされるとは、また眼病などによって、まさに色が原因で (rūpa-hetu) 人々は悩まされ害される (ruppanti bādhiyanti) (Pj.II. 603¹⁰⁻¹¹)

と述べている。他の経文にも

比丘達よ。ね。悩まされる (ruppati, 苦しめられる) というので、それゆえに色と呼ばれる。何によって悩まされるのか。寒さによっても悩まされる。暑さによっても。飢えによっても。渴きによっても。蚊・虻・風・炎熱・蛇と触れるから悩まされる。(S.III. p.86²³⁻²⁷; 『雑阿含』 卷2 (46): T.2.11b²⁷⁻²⁹)

とある。これが色の一般的な特徴 (定義) となる (AKBh.p.9¹⁰⁻¹²; 『俱舍論』 T.29.3b²³⁻²⁵)。これが広義の色の類、つまり五蘊 (色・受・想・行・識) の色 (色蘊) であり、五感とその対象と体内外の諸要素 (法) であって、知覚され意識される (Vism.p.443²⁹⁻)。

2. 認識領域 (十二処：六内処，六外処) における色：狭義の色

五感と心 (意) とそれらの対象とは、我々の知覚や認識が行われる全領域である。眼・耳・鼻・舌・身と心 (意) とは6つの認識の内的な領域 (六内処) と呼ばれる。意 (manas, こころ) もまた感官 (indriya, 根, 器官, 機能) と考えられているから、これらは6種の感官 (六根) でもある。その対象 (六境：色・声・香・味・触・法) が6つの認識の外的な領域 (六外処) と呼ばれる。両方合わせると12の認識の領域 (十二処) となる。身 (kāya) とは身体 (からだ) であるが、触覚 (皮膚感覚) を始めとする身体感覚の器官 (機能) を意味し、その対象である触とは身体感覚で知られる = 触れられるもの (所触 = 触知される対象 poṭṭhabba), 感触や感じの類である。他学派では皮膚による皮膚感覚 (触覚) をいうが、仏教では身体による身体感覚をいうのである。また心 (意) で思われ知られ考えられるもの (こと, ことが

ら)を法 (dhamma) と呼ぶのも、仏教に特徴的な用語法である。

この六内処と六外処とは、経典によれば、「一切」と呼ばれる (S.IV.p.15¹³, 『雜阿含』卷13 (319: T.2.91a²⁷)). これはいわば自分にとって存在するものの総体である。これは自分の在りよう・在り方 (生存, 存在) の総体であり, 自分の身心及び経験する全領域, 自分の全世界である。この十二処の識 (知覚や認識) を別立てにして, 眼識 (視覚)・耳識 (聴覚)・鼻識 (嗅覚)・舌識 (味覚)・身識 (身体感覚)・意識* (意による認識) に分けると, 18 の認識要素 (十八界) となる。これも「一切」と呼ばれる (Vin.I. p.34¹⁵). ここでは色は, 眼 (視覚器官) の対象であり, 眼に見えるもの (色処, 色界) だけである。これが狭義の色である。

3. 五蘊の色：広義の色：感じられ意識されるもの (法：要素)

この五感と心 (意) の六つ (六感官, 六根) をもって人の在りようを捉えることは, 古くより行われた見方であろう。古い詩節にも『六つ (六感官とその対象) があると世間が生じている』 (Sn.169 = S.I.p.41⁴⁻⁵) とある。六つとは六内処と六外処であると註釈はいう (Pj.II.p.211³). この六感官を中心とする体系に比べると, 五つの集まり (五蘊: 色・受・想・行・識) は難解で, 五つの集まり (khandha, 蘊, 陰, 衆) というのも分かりにくい。これらは古い韻文経典 (Sn., S.I, Dh.) には出ていない。

ともあれ, これは自分の心身の在りようを5種の要素 (或いは属性) の集合と見る仏教独特の用語体系を示している。おおむね十二処の体系の中の五感 (五根: 眼・耳・鼻・舌・身) とその対象 (五境: 色・声・香・味・触) とは, 色という集まり (色蘊, 色の類) に含まれる。これは広義の色であって, 眼に見えるもの (狭義の色) だけではないが, 結論的には全て感じられ意識される。眼や他の感官も身体感覚 (身) を介して意識される。このような広義の色の特徴を, 次に見よう。

こういう色を「物質」と呼んではならない。「物質永遠の法則」ともいうように, 物質は通常は永遠に存在する (尤も核反応を想定すると違うという)。物質は見え実感できるものとは限らない。知覚されない物質は多い。知覚し難く実感し難く意識し難い物質は, 色の特徴とは合わない。生物を構成している物質は常に新陳代謝をするから, 変化し移動するが, 元素としては永遠であり, 無常ではない。この色を物質とか, 物質的現象, 物質的要素などと訳解するのは, 原典の原意としても誤っているし, また物質という邦語の一般的な用語法にも反している。

a 色蘊の原因：四大要素 (大種 mahā-bhūtā)

色蘊はその存立の根拠に遡って考察される。

(220) 色 (rūpa) は物質ではない (村 上)

比丘よ、ね、色蘊（色類の集合）を設定する（知らせる）ためには (paññāpanāya) [地・水・火・風という] 四大要素（大種 mahā-bhūtā）が根拠（因 hetu）であり、四大要素が条件（縁 paccaya）である。受蘊（感受，感，感情の類の集合）を設定する（知らせる）ためには触（phassa, 感官と対象と接して識が生じること）が根拠であり触が条件である。想蘊（観念，概念，心象の類の集合）を。行蘊（心身の潜勢力の類の集合）を。識蘊（認識の類の集合）を設定（表示）するためには名色（nāma-rūpaṃ, 受・想・行・色，つまり心身）が根拠であり名色が条件である。（S.III, pp.101³²-102³, M.III, p.17¹⁵⁻¹⁶; 『雜阿含』卷2 (58) : T.2.14c¹¹⁻¹⁷; MA.IV, p.78 は再生する識に関して述べる）

という。今は体内外の地・水・火・風を四大要素という。漢訳の伝統では、四大種、または四大という。これを元素と見るのは問題である。なぜなら元素は物質に通じるからである。この大種（mahā-bhūtā）は物質ではない。bhūta とは生き物であり精霊の類である（Sn.222）。地・水・火・風も本来は神であり、神は人の体にも入るのである。四大要素（四大種）とは、いわば四つの大きな生き物（生命）という要素（四大生命要素）とでもいうべきであろう。それは我々の体内外にあり、体の構成部分・要素でもあって、五感によって感じられ意識され得る。しかし元素や物質は、物理学や化学の用語であって、その多くは五感では感じられない。そして心身の在り方を観察する仏教になじまない。

上例では、体内外にも四大要素があるから、色を概念的に設定し知らせることもできるという。この色と四大要素との区別は、次の諸例ではなくなっている。

仏教の修行者（比丘）の修行生活の心得を、牛群を放牧して暮らす牧牛者（gopālaka）の心得に喩える2経典がある（M.33 Mahā-gopālaka-suttaṃ 牧牛者大経 M. I, pp. 220-224 ; A. Ekādasaka-Nipāta 18 [Vñ. Gopāla-suttaṃ 牧牛者経] A.V, pp. 347-353）。ともに同じ内容であるが、後者には前者の最初の4行と末尾の2行がない。これに対応する漢訳の3本もほぼ同趣旨である（求那跋陀羅訳『雜阿含經』卷第47（1249：牧牛者経）：T.2.No.99, 342c-343b, 鳩摩羅什訳『仏説放牛經』：T.2.No.123, 546a-547b, 僧伽提婆訳『增壹阿含經』卷46, 放牛品第49.1：T.2.No.125, 794a-795a）。ここではまず心得の悪い例11箇条から説き始めて、次にその反対によい心得11箇条を列举して説法を締め括る。その最初がともに「色を知るものでない (na rūpa-ññū hoti)」という。

牧牛者が「色を知るもの」でなければならないという「色」とは、註釈書によれば、牛の数を数えて、逃げた牛を探し求め、自分の牛か他人の牛かを確かめるための「色」である。牛について白い・赤い・黒いなどと、色彩 (vaṇṇa) を知ることにも関連している（MA.II, p.258, AA.V, pp.87-88）。一方、比丘が知っていなければならない「色」とは、広義の色であり、次のように説かれている。

また比丘達よ、どのように比丘は色を知る者 (rūpa-ññū) ではないのか。ここに、比丘達よ、比丘が何でも色であるもの：つまり一切の色が〔地・水・火・風という〕四大種 (四大要素 cattāri mahā-bhūtāni) と四大種所造色 (四大要素に拠っている色 catunnañ ca mahā-bhūtānaṃ upādāya-rūpan) とであると、如実に悟らない (na ppajānāti). (M.I.p. 220²⁴⁻²⁷, A.V.p.348⁷⁻¹¹; 『雑阿含經』 卷 47 (1249): T.2. 342c²⁵⁻²⁶: 云何名_レ不_レ知_レ色。諸所有色。彼一切四大。及四大造; Cf.T.2.546b²⁻³, T.2.794a²³⁻²⁵)

と、牛を放牧すると同様に、色を知っていることは仏道を修する場合においても、第一に必要な。 「色 (rūpa)」については、今日、我々がその現代語訳と解釈を試みて間違い或いは迷う。正しく理解したい。経文は次のようにも述べている。

四大種 (四大) と四大種に拠っている色 (四大所造色), 比丘達よ、これが色と呼ばれる。食物の集起から色の集起があり (āhāra-samudayā rūpa-samudayo), 食物の滅から色の滅があり、正しくこの八支の聖道が色の滅に至る道である。即ち正見、乃至、正定である。 (S.III. pp.59¹⁹⁻²⁴, 62¹¹⁻⁵; 『雑阿含』 卷 2 (41): T.2.9b)

と、この色は肉体の属性 (感じられ意識されるもの) を意味するであろう。食物を摂れば肉体とともに色も存立するが、食物が尽きると肉体は存立できず色も滅する。八聖道によって色の滅に至るとは、輪廻を断じて色を滅するのである。

この四大要素の詳細は舍利弗が説いたと伝えられている (M.28 Mahāhatthipadopama-s.: I.pp.184-191; 『中阿含』 卷 7 (30) 「象跡喻經」, T. 1.464c-467a)。そこでは、四聖諦の第一の苦聖諦を説明する中にこの詳細が示される。五取蘊 (五つの執らわれとなる集合 pañc'upādāna-kkhandhā) の最初の色取蘊 (= 執らわれとなる色の類, 色という執らわれとなる集合 rūp'upādāna-kkhandha) とは、四大種と四大種に拠っている色 (四大所造色) である。四大種はそれぞれ要素 (成分, 界 dhātu) と呼ばれ、地の要素 (地界), 水の要素 (水界), 火の要素 (火界), そして風の要素 (風界) である。各々は内的な体内にあるものと、外的な体外 (自然界) にあるものとに分かれるが、前者が詳説される。内的な地の要素 (ajjhakkā pathavī-dhātu) は、

髪・毛・爪・歯・皮膚・肉・筋 (腱や血管等)・骨・骨髓・腎臓・心臓・肝臓・膜・脾臓・肺臓・腸・腸間膜・胃物・糞、或いは他の何でも体内に各自に取り入れられた粗く堅くなったものである。 (M.I.p.185¹⁷⁻²¹; T.1.464c⁸⁻¹⁰)

という。ここで「粗く堅くなったもの」 (kakkhaḷaṃ khari-gaṭaṃ) というのが、地の特殊な現象的な性質であり在り方である。そういう現象的な在り方をしている身体構成部分が列挙される。体表にあって感知できる髪・毛・爪・歯・皮膚から始まり、皮膚に包まれて見えない体内にある肉・筋・骨・骨髓、更に臓腑等を含む 19 種 (漢訳では 17 種) が列挙される。胃物と糞とは、嘔吐や排泄の際に見える。

(222) 色 (rūpa) は物質ではない (村上)

しかしその他は、怪我の際には見えるであろうが、通常は見えない。しかし知識に依存して我々の意識にも上る。そして傷つき不調を来した箇所は嫌でも気になり意識される。内的な水の要素 (ajjhakkā āpo-dhātu) は、

胆汁・粘液 (胃液)・膿・血・汗・脂肪・涙・膏・唾^{あぶら}液・鼻汁・関節液・尿、或いは他の何でも体内に各自に取り入れられた水や水に含まれるものである。(M.I. p. 187⁵⁻⁹; T.1. 465a^{27-b¹})

と示される。「水や水に含まれるもの」(āpo āpo-gatam) というのが、水の特殊な現象的な性質であり在り方である。そして体内にある水分と体外に排出される水分が 12 種 (漢訳では 13 種) も列挙される。脂肪や関節液は眼に触れないが、怪我の際に見える。体外に出てくる水分は、眼にも見え体感もできる。膿は外傷か病気が原因となつてできる。これらは、いずれも体内の構成要素である。内的な地の要素は 19 種、内的な水の要素は 12 種あるから、合わせた 31 種が身体 of 構成要素である。これに脳髓を加えた 32 の部分が、三十二相と呼ばれ、観想の修行 (業処 kamma-ttāhāna) において、観想し思念を凝らす対象になる。

火と風の要素は身体 of 構成要素ではなくて、生体に不可欠な働きを与えるのであり、体の機能や作用である。内的な火の要素 (ajjhakkā tejo-dhātu) は、

凡そそれによって熱せられ、老化し、また焼かれ、また食べ嚙まれ味わわれたものが正しく消化するもの、或いは他の何でも体内に各自に取り入れられた火や火になったもの (M.I. p. 188⁶⁻¹⁰; T.1.465c¹⁷⁻¹⁹)

と、体温や老化や消化の機能が火の特殊な現象的な性質であり在り方である。

内的な風の要素 (ajjhakkā vāyo-dhātu) は、

上方に行く風・下方に行く風・腹中にある風・下腹部にある風・手足に従う風・出息・入息とか、或いは他の何でも体内に各自に取り入れられた風や風に含まれるもの。(M.I. p. 188²⁸⁻³²; T.1.465b⁹⁻¹²)

という 7 種 (漢訳では 11 種) の呼吸や気が風の現象的な性質であり在り方である。地と水とは肉体の諸部分や諸成分であり、火は消化や体温などの機能であり、風は呼吸等の身体機能である。それらはいずれも五感で感じられ意識され得る。

この経文では地の要素、乃至、風の要素のそれぞれに対して、

そこで「これは私のものではない」、「私はこれではない」、「これは私の我 (魂、霊) ではない」と、このようにこれを有りのままに (如実に) 正しい智慧によって見るべきである。(M.I. pp. 185²³⁻²⁵, 187¹⁰⁻¹², 188^{12-14, 34-36}; 漢訳欠)

と、繰り返される。そして『このようにこれを有りのままに (如実に) 正しい智

慧によって見ては (disvā)』, 地の要素, 乃至, 風の『要素を厭い (-dhātuyā nibbindati)』, それぞれの『要素から心を離れさせる (-dhātuyā cittaṃ virājeti)』と繰り返される (M.I. pp. 185²⁵⁻²⁷, 187¹²⁻¹⁴, 188^{14-17, 36-37}; 漢訳欠).

ここに列挙されている身体の諸部分・構成要素 (合計 31 種), また生体の呼吸や循環等の諸機能は, どれも普通には「私のものだ」と思われやすい. だからこそ『「これは私のものではない」, 「私はこれではない」, 「これは私の我 (魂, 霊) ではない』と教え諭されたのである. ただ客観的に身体の諸部分や内臓等を列挙したのではない. 註釈は, これを観想法 (観念修行法, 業処) として解説する.

しかしここに思念に励んで観察を増大させ阿羅漢の境地を把握しようと欲する者が, 為すべきその一切は『清浄道論』において詳論された. (MA. II.p. 222³⁵⁻)

と. ここは『清浄道論』(Vism.) に説かれている 40 種の観想法 (業処) の身至念 (念身 kāya-gatā-sati, 自分の身に関する思念) に関係がある. そこでは, 身体の諸構成部分の 32 種 (行相 ākāra, 在り方, 在りよう) を列挙し, その観想法を詳論している (Vism. PTS.ed. pp.239-266; 水野弘元訳『南伝』63, pp.25-76). それは上の 31 種に脳髓 (mattha-luṅga) を加えるのである. この身至念については, 韻文 (偈) にも,

おまえは身に関する思念を持てよ. しばしば厭離する者であれよ. (Sn.340cd = S.I.p.188; 『雑阿含経』 卷 45 (1214) : T.2.331b⁵); 『別訳雑阿含』 卷 12 (230) : T.2.458b¹³)

とある. 身至念 (念身) を主題とする経典もある (『中部 [経典]』 119 「念身経」 : Kāyagatā-sati-sutta, M.III. pp.88-99; 『中阿含経』 卷 20 (81) 「念身経」 : T.I.554c-557c). ここでは注意を呼吸に注ぎ (入出息念), 行住坐臥に注ぎ, 不浄で満ち溢れる身体の諸部分・諸臓器について観想し, 墓場に捨てられた死体が腐乱して, 終には粉々の骨になる様相を, わが身のこととして観想するのである. 身体の諸部分・諸臓器・分泌液等の数と順序は, 上掲のように 31 種となる (M.III.p.90¹⁴⁻¹⁸, しかし漢訳は少し異なる).

比丘が女人への貪り心を持たないように, 不浄な身の諸部分・諸臓器 31 種を観想するという (S.35.127.Bhāradvāja 6 : IV. p.111¹⁷⁻²¹, 『雑阿含』 卷 43 (1165)).

この身体の諸部分・諸臓器の同じ 31 種は, 自分の身・受 (感受)・心・法 (教え, 修行法) を観察し思念する修行法である四念処 (sati-paṭṭhāna) を説く経典において, 最初の身を巡る観察のところに同文で説かれる (D.22 Mahā-satipaṭṭhāna-suttanta 5 : II. p.293¹²⁻¹⁷, M.10 Satipaṭṭhāna-sutta : I.p.57¹⁵⁻²⁰; 『中阿含経』 卷 24 (98) 「念処経」 T.I.583b⁶⁻⁹).

このように修行法として自分の身を思念するのである. 実際に体内の臓器等を肉眼によって見なくとも, 心の眼をもって見て観想するのである.

(224)

色 (rūpa) は物質ではない (村 上)

外的な地の要素は大地である。外的な水や火や風の要素が怒ると、それぞれ大洪水、大火災、大風という自然現象として猛威を振るう。しかしその猛威もまた止むのであり、無常なのである。

b 四大所造色 (大種所造, 所造色)

これはパーリ經典には説明がないが、『雑阿含』巻 13 (322: T.2.91c) では、眼・耳・鼻・舌・身の五感 (五根) と、その対象である色・声・香・味・触 (所触, 触れられ体感されるもの) とである。触 (所触) は大種所造でもあり、また大種でもある。五感は無表色 (rūpa-prasāda) とされる (『俱舍論』巻 2: T.29.8c¹¹⁻¹⁷, AKBh.p.24³⁻⁸)。更に無表色 (avijñapti, 行為の後に残る悪または善を妨げる力, 特に受戒によって身についた防悪の力) をも加えるのが、有部の伝統である。

パーリ『法集論』(Dhamma-saṅgaṇi, Dhs. § 597ff.) では、同じく五感と色・声・香・味の 9 つが大種所造 (= 所造色 upādā-rūpa) であるが、無表色はない。触 (所触処) に所造色を認めず (Dhs. § 648), 所造色を 24 とする (Dhs. § 596)。即ち上の 9 つに女根 (女性機能 itth'indriya)・男根 (男性機能 puris'indriya)・命根 (生命機能 jīviti'indriya)・心基 (hadaya-vatthu, 心臓の血にあるという意界と意識界の基体)・身表示 (kāya-viññatti)・語表示 (vacī-v.)・虚空要素 (界)・色の軽快性 (rūpassa lahutā)・色の柔軟性 (く mudutā)・色の作業適性 (く kammaññatā)・色の積集 (く upacaya)・色の相続 (く santati)・色の老化 (く jaratā)・色の無常性 (く aniccatā)・丸めた飯の食物 (段食 kabaḷikāra āhāra) の 15 を加えるのである (Vism. p.444¹⁻⁶)。尤も心基を除き、触処と水要素 (界) を加え 25 所造色とする (MA.II.p.261, AA.V.p.92) など、異説もある。女根等の 6 種と色の 7 種の性質 (属性) とは、体の機能や作用であり、虚空要素は色を区画し体内の空隙となり、段食は生命を繋ぐ。これらもまた感官によって知覚され意識されるはずである。

以上、色の集まり (色の類, 色蘊) について、広く大雑把に見たが、いずれの色も「感じられ意識されるもの」という色の特徴 (定義) に反しない。そしてその「もの」とは、構成部分、構成要素・属性・機能・作用などという類であり、それが法 (dhamma) と呼ばれるのである (Vism.p.443²⁹⁻)。

* 略号等については村上真完・及川真介『パーリ仏教辞典』(春秋社, 2009) 参照。

〈キーワード〉 rūpa, 色, 感じられ意識されるもの, 身体感覚, 物質

(東北大学名誉教授, 文博)